



部門研究2 2004年度第4回研究会

日 時 / 2004年11月27日(土)
会 場 / 東京・大手町サンスカイルーム

発 表 / 中山俊宏(日本国際問題研究所主任研究員)
三浦俊章(朝日新聞論説委員)

コメント / 伊奈久喜(日本経済新聞論説委員)
森 孝一(同志社大学大学院神学研究科教授)

スケジュール

1:00～2:00 発表:中山俊宏「米国保守派の支持基盤と宗教保守派の位置づけ」
2:00～3:00 発表:三浦俊章「分極化するアメリカ——世界との関係を修復できるか」
3:00～3:15 休憩
3:15～3:25 コメント:伊奈久喜
3:25～3:35 コメント:森 孝一
3:35～6:30 ディスカッション
7:00～8:30 懇談会(自由参加)

研究会概要

- 中山氏は保守派と宗教右派の関係を歴史的に解き明かした。伝統の浅いアメリカにおける保守主義は、将来のビジョンを提示するという特色を持つ。50年代以降、カウンター・カルチャーに対抗すべく保守勢力は漸進的に宗教右派を政治基盤に取り込んできた。同性愛や中絶問題で、宗教右派はリベラル派に対する反発を強めていく中で、元来、民主党を支持してきたカトリック派の中においても、民主党のリベラルな政策から距離を置き、共和党へ宗旨替えするようになる。こうした動きに呼応し、大統領選挙戦においてもカーター以後、宗教を意識したレトリックが候補者から発せられるようになった。保守派と宗教右派の結びつきに成功したのがレーガンであり、ブッシュ・ジュニアにもその傾向が顕著に見られる。ブッシュ政権は国務省が毎年、宗教の自由に関して出す報告書にも力を入れるようになった。しかし、多様な価値観が混在するアメリカで、宗教右派がいかに結束力を誇っても、その政治的影響力には限界がある。中間層の取り込みが必要不可欠であり、ブッシュも中間層を取り込むことに努めた。一方、民主党は、自身の支持基盤を一部とはいえ、2004年大統領選挙で共和党に切り崩されてしまい、今後党の建て直しに課題を残すことになった。
- 三浦氏は、ブッシュとの関係を踏まえて、パウエル、ライスという新旧国務長官の比較を行い、今後のアメリカ外交を分析した。
パウエルは、ワシントン勤務が多く、政治と軍事の結節点でその能力を発揮してきたが、自身の明確なビジョンを持っているとはいいがたい。パウエルは、国務長官としてイラク戦争に慎重な姿勢を見せたが、国務省の利益を主張していた側面が強い。一方、彼はアフターマティヴ・アクションや銃の規制に賛成するなど穏健で、リベラルでもあった。しかしそれゆえに、1996年の大統領選挙で副大統領候補の呼び声が高かったにもかかわらず、共和党保守派を抑えきれないと判断され、国務長官に就任する。プラグマティストとある彼は、しばしばネオコンとの確執が取りざたされたが、ネオコンのような明確なビジョンを持っておら

ず、そこに彼の限界があったのではないか。

ライスは、19歳でデンバー大学を卒業した秀才の誉れ高い黒人女性であり、ソ連問題の専門家であった。ライスは自身の見解を明確にすることなく、論争があっても当事者双方がライスを自分たちの味方であると思うようなタイプの人材であり、ブッシュへの忠誠心も高い。こうしたことから彼女によって、アメリカ外交が大きく変化することではなく、むしろイラク問題を含め混沌とするのではないだろうか。

(CISMOR奨励研究員・法学研究科博士後期課程 小出輝章)

- 価値／安全保障問題に弱いというイメージからいかに脱却するか？
- 2004年で動員したグラスルーツをいかに維持できるか？

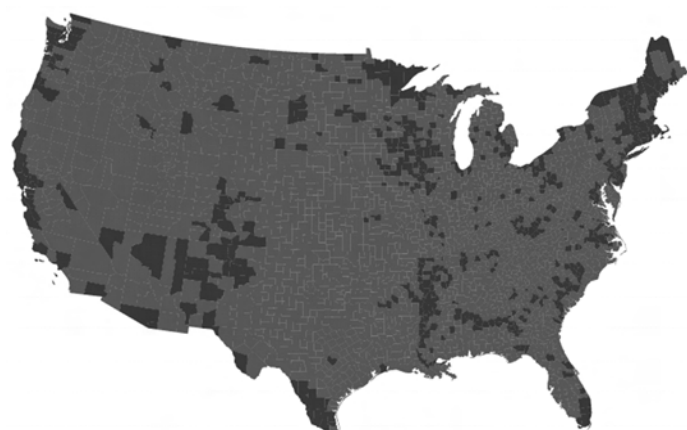
9. 共和党優位時代が固定するのか？

- ホワイトハウス、上下両院、知事、最高裁
- 「世俗化という事実」対「宗教的シンボリズム」
- 1992年の宗教右派による攻勢
- 「行政府」対「立法府」

10. 評価

- マルクス主義に対する3つのアンチテーゼ
- 保守化という現象をきめ細かに理解する必要性
- 2004年をどう評価するか
- 保守派内部の亀裂

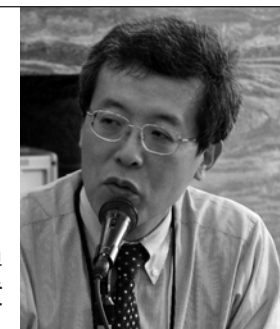
(以上)



地図-1
(色が濃い部分＝青 薄い部分＝赤)

分極化するアメリカ ——世界との関係を修復できるか

朝日新聞社論説委員
三浦 俊章



私は新聞記者ですので、文献を読みこなしたり、学問的な裏付けの必要な話にはできないのですが、たまたまブッシュ政権の最初の2年余りを、現地のワシントンで取材しました。新聞記者には運不運があり、世の中の不幸な目に会われる方には申し訳ないのですが、大きな事件があると新聞記者にとっては幸運だという悲しい商売です。ワシントンに行くまではそういうことには出会わなかったのですが、人生のすべてが回ってきたように、9・11テロを現地で体験し、その後のアメリカをフォローして、昨年5月、ブッシュ大統領が「主要な局面は終わった」と航空母艦のエブラハム・リンカーンの上で宣言したのを見届けて帰ってきました。今日の話は、理論的というよりは、自分が現地で出会ったこと、何人かの主要な政権の内外にいる人たちに会った時のエピソードをお話しながら考えていきたいと思います。

先程の中山さんのお話が興味深く勉強になりました。二、三、自分が向こうで聞いたことと符号する点があったので、まずそれを話してから、本題に入りたいと思います。日本では、ネオコンとか宗教右派と一緒にカリカチュア、すべてそれで説明できるかのように、やや単純化した状況になっているので、そういう見方を提供した私の属しているマスメディアの罪は重いと思いますが、中山さんのバランスのとれた見方は重要だと思います。私も、急にアメリカが宗教右派とか、右傾化したという感じはしないのですが、なぜそんなふうに見えるのでしょうか。一つの原因は、もともとアメリカの中に、世

俗的な都会的なものと、農村部の保守的な対立等の亀裂はあったのだけれども、今のアメリカの政治構造が共和党と民主党の対立構造、まさにアメリカの社会の亀裂をそのまま写しだすような形の政治、政党の構図に変わってしまっているということが、理由ではないかと思います。20年以上前、私が大学で勉強していた頃、アメリカの民主党、共和党はイデオロギー的には変わらないとcross-votingがあって、州ごとに違っていたと言われていたのですが、今はかなり南部の保守層が共和党に取り込まれてしまい、イデオロギー、思想的、社会的亀裂を反映した政治構造になっているので、より際立ってそれが見えることになり、政治争点化されてしまうのではないかと思います。宗教右派やキリスト教右派は、政治運動化している側面と重なっているのではないかという気がしました。

もう一つ、アメリカの保守化の点について私が現地で感じたことで、中山さんに同感したのは、フロリダ等で共和党や民主党はどうやって票を集めているか、運動していくかを見てみると、民主党は、昔ながらの組織、労組、リベラルな組織を使って中間組織を束ねているということです。互いの連環がとれていないような古めかしい感じがします。共和党は、ボランティアがデータ集積して計画的に会社を経営するように行っています。個人的に南部を見て運動の仕方が違うように思い、疑問を抱いていたのですが、中山さんの説明で合点がいきました。

向こうで思ったのは、レッドステイトというブッシュの支持層が固いところが、今、産業が伸び、人

米国保守派の支持基盤と 宗教保守派の位置づけ

日本国際問題研究所主任研究員

中山 俊宏



渡辺先生もそうですが、永井陽之助先生、押村高先生のもとで指導を受けました。博士論文ではアメリカの共産主義に関する論文を書きましたが、その後、日本国際問題研究所に入ってから保守主義を中心に見てきました。ある種の政治、社会の中でのフリンジをプリズムにしてアメリカのメインストリームを見るという発想です。国際政治におけるリアリズムが戦争という極限状態を媒介にして国際政治をアプローチしていくのと若干、似ていると思いますが、フリンジを研究した私がここにいるということは、アメリカの保守というかつてのフリンジ勢力が相当メインストリーム化していることの象徴であろうと思います。

今回、お話をさせていただくのは、必ずしも選挙そのものではないですが、2004年の大統領選挙において保守派、中でも宗教右派、宗教保守派と呼ばれる人たちが、どのように動いたのかについて言及させていただきたいと思います。若干、選挙についての印象を申し上げますと、今回の選挙は非常に分裂し、非常にダーティな選挙として記憶されることになるだろうと思います。最終的には歴史家が評価することですが、概ねきわめてノイジーな選挙として記憶されるものと思います。しかしながら別の見方をしますと、激戦州でないところは非常に静かな選挙だったと思います。全国メディア、ケーブルニュースでは選挙の様子が絶えず放送されていましたが、どっちに転がるか決まっている州においては、ほとんど候補者のコマーシャルも流されず、非常に静かな選挙だったという一面

もあるかと思います。

もう一つ違った見方をしますと、投票率が60%ときわめて高く、ある意味において、健全な選挙だったという見方もできると思います。マス・デモクラシーが機能するためにはアパシーが必要だというシニカルな立場に立たない限り、投票率が上がったということ自体は、健全な選挙だったといえます。アメリカは、二大政党制なわけですから、選挙の際に党派性が高まるのはむしろ当然で、健全との見方もありうるかと思います。

「米国保守派の支持基盤と宗教保守派の位置づけ」という本題に入る前に、イデオロギーが絡んでくる話なので、語句の整理と基本的な事実の確認として、そもそもアメリカにおける保守主義とは何かという点について言及したいと思います。よくアメリカで保守派が台頭していると言われますが、その実態は必ずしも明確ではありません。単純化していえば、回帰すべき過去がない国における保守とは何かという問題につきあたります。アメリカの保守は絶えず、このような問題に直面してきました。その意味でヨーロッパにおける保守、日本における保守とは常に違うという点を意識しておくことが重要です。つまり、アメリカにおける保守は、将来的なビジョンを示す保守という捉じれた位置づけになっていると思います。現在、それに対峙する形でリベラルがあるわけですが、リベラルという言葉も最近避けられていて、「プログレッシブ」という言葉が流行りのようです。かつてアメリカにおける保守派は、リベラル派が設定するアジェンダに対抗

する形で、50年代、60年代にかけて政治勢力として台頭してきました。若干単純化すると、現状では保守派が新しいアジェンダを設定して、現状を打破しようとし、それに対してリベラル派が現状を維持しようとしているという構図になっている。リベラルが守り、保守が攻勢にでる。ここにも振れがあります。

さらに宗教右派、福音派、ファンダメンタリズムは同義の言葉として語られますが、福音派の中にもリベラルな福音派がいますし、黒人のエヴァンジェリカルと定義してもおかしくないような人たちは社会問題については確かに保守的ですが、連邦制の役割についてはリベラルな考え方をしている、エヴァンジェリカル＝保守というふうに単純に切れるわけではない。

さらにもう一つ混乱する要素としてカソリックと保守があると思います。カソリックは、従来は民主党の支持基盤でした。しかしながらアフリカン・アメリカン・コミュニティ同様、きれいに論争の軸にはあてはまらなくて、社会、文化問題では保守、連邦政府の役割についてはリベラルということで、きれいに整理できません。また保守系の知識人の中にもカソリック系の知識人が多数います。これまでカソリックは、重要なスイングボーターとしての位置づけをアメリカの歴史において占めてきたということが言えると思いますが、今後もそのような役割を担っていくでしょう。これはラティーノ・アメリカンの台頭という現象とも呼応しています。すでに述べたように、リベラルなエヴァンジェリカルもたくさんいて、選挙期間中、それなりに発言していたのですが、ほとんど目立ちませんでした。あえてこちらから探していけない限り、ほとんど目立たなかったのが実態だと思います。「逗留者(Sojourners)」はその中でも比較的活発で、自分自身、ウェブ(<http://www.sojo.net/>)などで彼らの発言を見ていました。

もう一つ基本的事実として、アメリカというのは先進国で最も信心深い国で、BBCの2004年2月の

調査では「あなたは常に神を信じてきましたか」という問いに対して先進国では圧倒的に高く、「イエス」と答えた人は80%近い。イギリスでは46%、韓国では31%、ロシアでは42%。アメリカでは間違いなく多文化化は進んでいて、これが時代の趨勢であり、イスラームの人口が増加しているとは言われていますが、依然として「キリスト教国家」であるという事実は変わっていません。その分類はカソリックが25%、エヴァンジェリカル・プロテスタントが25%、メインライン・プロテスタントが20%です。この調査は、実際には教会には行かない人も含んでいるので、若干多めの数字かもしれません。これはピューリサーチセンターが行った調査です。自らを世俗的(セキュラー)と位置づける人が15%。その他が15%だそうです。

今回の選挙を見ていく上で重要なのは次のような点だと思います。これは90年代後半以降の新しい傾向だと思います。今まではある宗派が総体として、ある党を支持するという構図が見られたのですが、90年代後半から政治的党派性の決定要因が宗派ではなく、信仰の度合いとなっているようです。信仰の度合いは計測することが難しいと思います。このことを明らかにした調査は単純に教会に行く回数を基準にしているようです。単純に教会に行く回数で信仰の度合いをはかるのは確かに問題だとは思いますが、一つの指標として見た場合に、党派性の決定要因は、宗派ではなく、信仰の度合いになってきています。

アメリカにおいて政治と宗教を語る場合に、カーター大統領が、ある種の分水嶺をなしています。カーターはみずからボーンアゲイン・クリスチャンと定義しましたが、カーター大統領以来、政治家も信仰心をより前面に押し出す傾向が出てきています。そういう意味で今のブッシュ大統領も宗教的なレトリックを散りばめています。ある種の傾向を代表しているに過ぎません。他方、ブッシュ大統領と宗教勢力の距離は今までに近く近いようです。



しかし、ブッシュ大統領の宗教性を評価する際には、注意深くそれを行う必要があると思われます。

福音派をどう位置づけるか。定義の仕方はいろいろあるようですが、一般的には聖書に書かれたことを字義通りに解釈する人たちとされています。ブッシュ大統領は自らをボーンアゲイン・クリスチャンであると位置づけているようですが、主流派のプロテスタントが漸進的な改心を志向しているのに対して、エヴァンジェリカルは啓示を受けて突然改心するようです。エヴァンジェリカルは、大人になって自ら自覚的に体験するということを重視しています。ブッシュ大統領が2000年の大統領選挙に臨むにあたって「自分はボーンアゲインである、神と向き合ったことによって人生が変わった」とディベートの場で言ったことは、宗教保守と呼ばれる勢力の心を掴む上で大きな影響を果たしたということが言えると思います。

エヴァンジェリカルは、救済に関する独特の信念、二元論的世界観が強く、天国と地獄、悪魔の現世における存在を信じている点において際立っています。日本語訳もでている『レフト・ビハインド』という小説があります。この小説は終末論的世界観をベースに、キリストの再来を描いた小説です。シリーズ化されていて大ベストセラーになっています。未見ですが映像化もされたようです。必ずしも出来はよくなかったようですが、エヴァンジェリカル・コミュニティでは非常に話題になっています。これはエヴァンジェリカルの世界観の共有に役立っているといわれます。

近年、主流派教会の影響力の低下が指摘されている。戒律が厳しい方が、今のアメリカでは宗教勢力として伸びる傾向があるようです。「意味」を提供するのが宗教の役割だとすると、戒律が厳しくないと安定した意味を提供できない。エヴァンジェリカルの伸張の背景には、戒律や規則の厳しさ、信仰の度合いを重視する傾向が作用しているようです。

エヴァンジェリカルは、本来は政治に関与することについては積極的ではなかったようです。政治は現世の活動であって、自分の力を割くべき活動ではない。1920年代、30年代の進化論闘争、禁酒法をめぐる論争等で最終的に敗退し、それ以降、アポリティカルな傾向がエヴァンジェリカルの間では根強かったようです。しかしながら60年代にカウンター・カルチャーが登場し、70年代にオルタナティブ・ライフスタイルが提示され、連邦政府の役割がますます大きくなり、宗教的空間が脅かされていると感じるようになると、再び政治化していくという傾向が出てきました。

次に宗教保守派の政治的影響力の行使の仕方について見ていきます。これは民主党のロビー、影響力のある利益団体と比較するとわかりやすいかと思います。民主党系の利益団体といえば、かつては真っ先に労働組合が上がりましたが、今回は労働組合をバックボーンにしたゲッパード候補が全然伸びず、労働組合の組織化の度合いが落ちて、腕力が低下していることが明らかになりました。今注目されているのは法廷弁護士集団で、アメリカ法廷弁護士協会(ATLA)という組織です。ATLAはアメリカ法曹協会(ABA)と比較しても小さい組織で、会員は10万人いません。であるにもかかわらず、民主党へ多額の政治資金を提供し、大きな影響力を発揮しているといわれます。やや極言すれば、彼らは票数ではなく、お金で党を動かそうとしている人たちです。全く対象的なのが宗教右派、エヴァンジェリカルの人たちです。宗教系の団体は政治活動委員会(PAC)をほとんど持っていない。つまり、政治資金ではなく、選挙の日、投票所に向かう力をその影響力の梃にしているといえます。共和党のメインストリームが宗教保守派の掲げるアジェンダについてどこまで本気で受け入れているのかは疑問が残るところです。宗教保守派のアジェンダを全面的に党の公約としてコミットすると、メインストリームを疎外してしまうか

もしれないという危機感があるので、あくまで選挙に向けてのレトリックの中で、宗教右派の関心を押さえる、逃げないようにしておくということが考え方のようです。いかに投票日に投票所に足を運ばせるか。これが重要な点です。いわゆる保守イデオロギーの中には宗教右派のアイディアはそんなに露骨には見えない。その点については後ほど言及させていただきます。

アメリカにおいて保守主義がどういうふうに台頭してきたか。色々な切り口があると思います。しかし、50年代から説き起こすのが一番わかりやすいと思います。30、40年代、反ニューディールという形で保守主義的な知識人の間で米国保守思想が芽生え始めます。しかし、これは知識人レベルの活動なので、運動としての保守主義を見ていく場合には50年代から立ち上げるのがいいと思います。米国保守思想には、三つの源流があります。今なお三つの源流は変わってないと思いますが、一つは小さな政府。もう一つが伝統的な価値の復権。もう一つが強いアメリカ、当時は反共主義と結びついていました。この三つが保守主義の柱です。この異なる潮流をひとつにまとめ上げたのが『ナショナルレビュー』誌を立ち上げたウィリアム・バックリー・Jr.です。ちなみに彼はカソリックです。彼は保守主義の中に三つの潮流があることを認めつつ、これを一つにまとめて一つの運動体にしていけないかと、ずっとこの後の40、50年間の人生を費やしてきたと言えると思います。先日、彼は『ナショナルレビュー』誌のチーフ・エディターの地位を退きましたが、彼はアメリカの保守主義を語る上において知的巨人として位置づけないといけないだろうと思います。

60年代には、アイディアのレベルできれいに整理されていった保守主義が、政治・社会運動体として登場してきます。60年代は一般にラディカルな時代とされます。一般に60年代は、学生ニューレフト(SDS)、公民権運動、平和運動、ブラックパン

サー、フェミニズム等に代表される左派の時代とされますが、その背後で、20年後、30年後の保守主義台頭のインフラがきっちり確立された時代という側面があり、これは見過されがちです。この時代は、急進的な運動、ニューレフト的な運動へのアンチテーゼとして、保守主義がその後の運動の基盤を準備した時期です。この時期、宗教保守派は勢力としてはまだ組織化されていません。他方、グラスルーツ・レベルの保守的な「感情」を結晶化させるにあたって、宗教が果たした役割は無視できません。特に新興住宅地(カリフォルニアのオレンジ・カウンティがよくその象徴的な事例として指摘されます)が増え、アメリカ各地から色々なバックグラウンドをもった人が集まってきます。ここで多くの人が、「レフトアローン」、つまり一人取り残されたような気持ちになり、そこでコミュニティの基盤になったのが、今でいうエヴァンジェリカルな動きです。このような動きが「保守的な感情」を結晶化させました。しかし、この時期は具体的な政治運動体としては表面化していなかった時期だと思っています。

1970年代、より直接的に、運動インフラの構築が始まります。保守系のシンクタンクとして有名なヘリテージ財団の設立者の一人に、保守主義運動を見ていく上で無視できないポール・ワイリックという人がいます。現在ワイリックは、自由議会財団(Free Congress Foundation)という組織の会長です。彼は宗教保守派を結束化させ、共和党支持の回路に流し込めば、強固な支持基盤になるのではないかとすることに初めて気づいた人だと言われています。この人もバックリーと並ぶアメリカ保守主義の大戦略家だと思っています。

このような動きに支えられて、レーガン政権が81年に誕生します。では70年代のニクソン政権は保守派の中でどう位置づけられたのか、少々話がそれますが、この問題に触れたいと思います。保守主義運動の立場、キリスト教右派の立場からする



と、ニクソンはあまりにもプラグマティックで、裏切られたという感情が強いといえます。保守主義運動の中ではニクソンはほとんど位置づけがありません。保守主義運動の歴史を語る時、ニクソンは無視されるか、否定的に言及されるかのどちらが多いようです。むしろ、共和党のクレディビリティを、ウォーターゲート事件で下げた人物との評価が支配的です。

レーガン政権が誕生して、その後を引き継いだブッシュ父政権で保守主義は一旦足踏みしますが、その後、クリントンのホワイトハウス入り、またいわゆる「ギングリッチ革命」によって保守主義はさらに勢いづき、ジョージ・ブッシュ政権の誕生に至るという流れがあると思います。

次に保守主義の台頭とリベラル・エスタブリッシュメントという問題について触れたいと思います。アメリカで真っ当な知識人とされた人で、保守系知識人という人はきわめて稀でした。例外的にはミルトン・フリードマンやハイエク等の経済学者がいますが、リベラル派は知的ヘゲモニーを実現していたといっても過言ではありません。このリベラル・エスタブリッシュメントは台頭する保守派をどのように解釈してきたのでしょうか。50年代に保守主義が誕生したころ、リベラル・インテレクチュアル・エスタブリッシュメントの代表格であったリチャード・ホフスタッターやダニエル・ベルは、米国における「右翼」の台頭を次のように解釈しました。彼らは研究対象としてマッカーシズムやジョン・バーチ協会を取り上げましたが、その結果として保守主義の将来的可能性を見誤り、それを排外主義と反知性主義の表象としてしか理解できませんでした。右翼を極右的傾向と同一視したことにより、逆にその後の潜在的可能性を見誤ったわけです。右翼、保守に、そういうネガティブな要素がないのではなく、それ以外の切り口から解釈しようとせず、ラディカル・ライトはいずれ消えてなくなるものだという意識が解釈の基調にあった

のだろうと思います。

ベル、ホフスタッターのみならず、リベラル派一般にも見られた傾向ですか、右翼・保守派は、パラノイア的反共主義の表出以外のなにものでもないという発想が根深くありました。レーガンが出てきた時の反応にも似たような傾向があったかと思います。当時、パークレーにいた私の知り合いは、レーガンのことを危険な人物で、パラノイックな反共主義者以外のなにものでもないとするように語っていました。私もそういう目でレーガンを見ていました。その後、交換留学でサウスダコタに行きました。私のホスト・ファーザーは保安官(シェリフ)でした。彼は、レーガン・デモクラットで、熱烈なレーガン支持者でした。幼いながら、同じアメリカなのにずいぶん違うなと感じたものです。リベラルなエスタブリッシュメントはレーガンをパラノイア的反共主義という切り口でしか解釈できず、潜在的な政治的可能性を正確に計測できなかったという面があるのは否定できないと思います。

では94年の「ギングリッチ革命」はどうだったか。ここでもリベラル派はまたもや同じ解釈の過ちをしてしまいます。ギングリッチを支えたのは、「怒れる白人の男」たちであり、自らが獲得した社会的ステイタスが台頭するマイノリティによって脅かされていると感じた反動的な田舎に住む白人の男たちが生み出した現象以外のなにものでもない。リベラル派は、このように解釈しました。そして、この反動的な勢力は、いずれ消えてなくなるだろうと。今回の選挙を見ましても、宗教右派がブッシュを勝たしたのだというトーンが強いと思います。宗教右派が、ブッシュ政権、共和党の支持基盤であることは間違いないことだと思います。だからといって、それがブッシュを勝たせたのかというと、そこまで単純では実はなく、着目すべきところは、宗教右派という、我々から見ると、フリンジにあるような運動を支持母体として抱えていたにもかかわらず、中道層と呼ばれる人たちが離れていかなかったこと、ここに着目

すべきではないかと私は思っております。

保守派と宗教勢力の関係を見ていきますと、エヴァンジェリカルを単純に全て保守派とは規定できない。確かにホワイト・エヴァンジェリカルの圧倒的多数は保守的傾向を代表していると思います。しかし『逗留者』周辺も、ホワイト・エヴァンジェリカルですから、例外はあるわけです。保守派と宗教勢力の歴史を見ていきますと、1950年代、当時、カソリックは民主党寄りであったにもかかわらず、保守派の思想的基盤をつくった人たちの多くはカソリックです。バックリーもそうです、保守派の聖人のような位置づけのウィットカー・チェンバーズは、1930年代には коммуニストで、アルジャー・ヒス(国務省高官)などと連携してアメリカ共産党のためにスパイ活動をし、後にヒースを告発する人です。この人も転向後、カソリック信仰を前面に打ち出し、反共主義のロジック、リベラリズムへの批判をカソリックへの信仰を軸に組み立てていきます。アメリカの保守主義の理念的な核をつくった人たちの多くが、カソリックであったということは注目すべきだと思います。

南部のプロテスタントを見てみますと、当初は民主党の支持基盤でした。しかしながら、これが、80年代はじめを境に逆転し、今では共和党の重要な支持基盤になっています。南部プロテスタントを共和党に鞍替えさせた一つ重要な事件、事象は72年の大統領選挙ですが、サウスダコタの上院議員のマクガヴァンを民主党が大統領候補として掲げ、彼のリベラリズムが南部プロテスタントを疎外した。ロー対ウェード判決で中絶が権利として容認されたことによって、南部プロテスタントが民主党から離れていく。民主党の中で、ウーマン・リブ、ゲイ・リブに対する理解度が高まってきて、それに対しても違和感を覚えるようになっていく。それとともにワイリックのような人が、こういう不満層をどうにか政治チャンネルに流し込めないかと、ニュー・ライトの勢力を形づくろうとします。保守的なプ

ロテスタントの人たちを中心にして、コミュニティの喪失感を動員する。1920年代に一度盛り上がった進化論闘争をもう一回始めて、教科書への抗議行動をやる。60、70年代にかけて白熱化したカルチュラル・ポリティックス、オルタナティブ・ライフスタイルへの違和感を軸に、ニュー・ライトを組織化していくわけです。

この流れはカーターによって一旦、歯止めがかけられます。カーター自身、自らボーンアゲイン・クリスチャンであるということを前面に打ち出して選挙に臨んだわけで、カーターへの期待があって、共和党への流れが一旦止まりましたが、しかしながらカーターは彼らをいろんな意味で裏切って、最終的にレーガン誕生の素地をつくる。この頃、ジェリー・ファルウェルのモラル・マジョリティがメディアに注目されて、ここで初めてメインストリームによって宗教右派というものの存在、政治勢力としての宗教右派の可能性が認識されたということが言えると思います。しかし今振り返ってみますと、モラル・マジョリティは実態としては脆弱な組織で、あったのはメーリング・リストとテレビ・コマーシャルのみだと言われます。確かにセンセーショナルでしたが、持続的な政治運動体として機能しなかったと言われます。

モラル・マジョリティによって宗教右派が発見され、この勢力がニュー・ライト、ニュー・クリスチャン・ライトとカテゴライズされ、民主党が続けてモデール候補、デューカキス候補というリベラル・エスタブリッシュメントから出てきたような人たちを、候補者として選んだことによって、ますます宗教保守派が共和党に流れていきます。そして1988年、パット・ロバートソンが大統領選挙予備選挙で大統領候補として名乗りをあげます。ただしモラル・マジョリティと同じで、持続的な政治運動体として機能しえなかったという問題があったと思います。そこで出てきたのが、パット・ロバートソン等が自分の選挙運動の反省を踏まえて立ち上げた「クリスチ



「クリスチャン・コアリション」です。クリスチャン・コアリションは宗教右派の歴史を見ていく上でエポックメイキングな画期的な組織で、今まで明確な戦略的なビジョンを持っていなかった集団が、歴史学の博士号を持つラルフ・リードによって組織体として強化されていきます。資金的にも潤沢な組織になって、明確なグランドデザインを持つにいたりました。クリスチャン・コアリションは、今はその影響力・組織力を弱体化させていますが、宗教右派の政治化へのプロセスにおいて、本格的に組織体、戦略をベースにした運動体として、「最初の一撃」の役割を果たしたといえることができます。およそ1年前、直接彼と会って話をしましたが、非常に頭の切れる人というイメージで、笑顔がすばらしく、テレジェニックであった彼の魅力を垣間見ました。人を引きつける人だという印象を持たざるをえなかったです。彼の主張に賛同したというわけではないのですが、明快に自分の立場を説明する能力においては秀でているという印象を持ちました。『ナショナル・ジャーナル』誌（これは非党派的なワシントンの政治業界誌ですが）が、クリスチャン・コアリションのことを「ステイト・オブ・ザ・アート・グラスルーツ・オーガニゼーション」と呼んでいることからもうかがえるように、草の根の動員組織としては、画期的なものでした。

クリスチャン・コアリションは1994年の中間選挙において重要な役割を果たし、共和党の下院における躍進を支えたと言われています。しかしラルフ・リードがやめた後、その力を落としています。一時、影響力を持ちすぎ、ある意味「エスタブリッシュメント化」してしまい、その結果として、一種のプラグマティズムが出てきて、それによって本来引きつけていたラディカル・ライトのエネルギーが離れてしまったという評価もあります。これが力を持ったラディカルなフリンジ・ムーブメントの限界ではあると思います。現在、クリスチャン・コアリションは州ベースの組織はあるようですが、全国的に一つの

運動体としては機能していません。このことは、今回の2004年の大統領選挙におけるキリスト教右派の動員のされ方とも関連してくる話ですので、後でまた言及させていただきます。

その後、いくつかの有力な組織が台頭します。ゲイリー・パウアのファミリー・リサーチ・カウンスル、ジェームス・ドブソンのフォーカス・オン・ザ・ファミリーなどがそうです。これは、家族の問題、同性婚の問題、中絶の問題、社会問題を前面に打ち出して、宗教保守派の関心に訴える方針で動いています。2004年、ブッシュ大統領の一般教書演説が行われた後、保守派のサイトや雑誌を見ると、「マリッジ・ムーブメント（結婚運動）」という言葉が出てきて、びっくりしましたが、結婚と運動がどう結びつくのか。考えてみると単純な話です。これは伝統的な結婚の形態を守る運動です。これは保守派のジャーゴンとして定着しているような印象を受けました。中絶の問題、同性婚の問題はまとめて「ライフ・イシューズ（life issues）」とカテゴライズするのが一般的なようで、 Frist 上院院内総務がこの言葉を使っているのを見かけました。

ファミリー・リサーチ・カウンスル、フォーカス・オン・ザ・ファミリーはクリスチャン・コアリションほどにはグラスルーツの政治的な動員力は持っていないようです。では今回、共和党、ブッシュ陣営が宗教右派をどういうふうに動員したか。2000年にも若干見られた傾向ですが、2004年にさらに顕著になった傾向は、中間組織を媒介せず、信者たちが直接選挙運動に飛び込んでいったことです。つまり、中間組織の不在という点が、2004年の大統領選挙における宗教右派の動員のされ方の特色だと思います。それが今後、恒久化していくのか、たまたまブッシュ大統領がエヴァンジェリカル・コミュニティから信頼されている人であったがゆえに可能であったことなのか。今後、注意深く見ていかないとわからないと思いますが、間違いないのはブッシュ大統領の個人的資質が大きな役割を果たしたという

ことは言えると思います。エヴァンジェリカル・コミュニティの間で、いまでも語り草になっているのは、2000年の予備選挙の際のディベートでのブッシュ大統領の発言です。モデレーターが、候補者たちに対し、「あなたの一番尊敬する哲学者は誰ですか」と尋ねます。当然、「ポリティカリー・コレクト」な答えは、トマス・ジェファーソンであったり、フェデラリストであったりしたわけですが、ブッシュ候補はまったく悪びれることなく「イエス・キリスト」と答えました。それが決定的な瞬間だったと思います。「それはなぜですか」とモデレーターが聞き返しますが、「キリストと向き合って実際に変わった経験をした人でないとわかりません。説明不可能です」ときっぱり自信ありげに答えます。その時に、エヴァンジェリカル・コミュニティのブッシュ支持が確定したといわれます。このシーンをモチーフとする映画が制作されていて、DVDのパッケージには「華氏911」に対する宗教右派側からの返答と書いてあります。ニューヨークで共和党大会が開催された時、宗教保守派をターゲットに上映会が数カ所で開催されたそうです。AMAZON.COMで購入しましたが、エヴァンジェリカル・コミュニティの間では広く無料で配付されたそうです。「Faith in the White house」というタイトルです。さすがに日本版は未発売のようです。

今回はブッシュ大統領個人の資質によって宗教保守派の動員に成功したのか、またはカール・ローヴ等が長期的な動員メカニズムを構築しえたのか、今後の2006年、2008年の選挙を見ていかないと最終的な評価はくだせないだろうと思います。

次にエヴァンジェリカルと外交の連関について述べたいと思います。いくつかわかった限りでは、ブッシュ政権になって、「United States Commission on International Religious Freedom (USCIRF)」が再活性化しているようです。国務省がこの独立委員会と連携して、毎年、宗教の自由に関して報告書を出しています。これは、クリントン政権時に成立した「International

Religious Freedom Act (IRFA)」にもとづき作成されるものです。これまでもたしかに報告書は出していましたが、ブッシュ政権になり、エヴァンジェリカル・コミュニティからの圧力もあって、これにかかわる一連の動きが再活性化したと聞いています。2002年春に、USCIRFにインタビューに行く機会がありましたが、非常に活発に活動しているという印象を受けました。

エヴァンジェリカル・コミュニティの関心事の一つはキリスト教徒の迫害の問題です。とりわけアフリカ、中国に強い関心を有し、イシューとしては、キリスト教徒の迫害の他に、人権、人道、セックス・トラフィッキングにも高い関心を持っているようです。2003年の国連総会一般演説で、ブッシュ大統領はヒューマン・トラフィッキングについて相当細かく且つ重要な問題として取り上げていました。妙に重視しすぎではないかと思っていたら、エヴァンジェリカル・コミュニティ側からの強い働きかけがあったということのようです。ブッシュ大統領のスピーチライターのマイケル・ガーソンは、エヴァンジェリカル・コミュニティとのチャンネルになっているといわれています。エヴァンジェリカル・コミュニティはキリスト教徒が迫害されているスーダンにとりわけ強い関心を有しています。フランクリン・グラハムが「Samaritan's Purse」という組織を率いて、スーダンで人道援助を行っています。これは、他意のない、人道的見地に基づいた純粋な活動と見ていいと思います。

なんで彼らはこのようなNGO的な活動に関心を持つのか。世間で流通している宗教保守派のイメージからはなかなか理解できない側面です。これはブッシュ政権の国内政策を語る際にしばしば登場する「信仰に基づくイニシアチブ（faith based initiative）」、「思いやりのある保守主義」の発想などとも通底しています。「信仰に基づくイニシアチブ」には、巨大な官僚機構を中心とする連邦政府に問題の解決を委ねるべきではないという発想を

垣間見ることが出来ます。つまり、顔の见えない連邦官僚たちに、コミュニティが抱える貧困の問題、教育の問題を任せるのではなく、コミュニティ構成員が、コミュニティの中で困っている人たちを「隣人」として助け合っているという発想がここにはある。ここには隣人が互いに助け合っているという「牧歌的」な慈善心がベースにある。しかし、これが複雑化した現代社会において、実際に機能するかどうかは別の問題です。スーダンにおける人道問題についても、国連などの、「のっぺらぼう」の国際官僚機構に資金を提供して事足れるとするのではなく、実際に自分たちが入って行って、顔の見える援助をするというある種ナイーブな、また純粋な善意の現れでもある。穿った見方をする必要はないかと思います。他方、どこまで普遍的に機能するかどうかは冷静に見ないといけないうちだと思います。

9・11以降、宗教保守と新保守主義はどこまで世界観を共有しているのでしょうか。同床異夢のようなところがあって、宗教右派は、本来、必ずしもアメリカの国際的な役割について積極的な考えを持つ人たちではありません。元来、善悪二元論的な宗教保守の世界観が、たまたま9・11以後、新保守主義者たちの世界観と共鳴があったということはいえると思います。どこまでこの共鳴が続くのか。もう共鳴の度合いは相当程度低くなっていると思いますが、今後、宗教保守が、「イラクから撤退すべきだ」と主張しはじめる可能性は否定できません。やはり根っこの部分では、孤立主義的なんだろうと思います。

PBSで今年6月頃、「ジーザス・ファクター(The Jesus Factor)」という番組が放送されました。(この番組はネット[www.pbs.org]でも見ることができます。)これは、ブッシュ大統領と福音派の関係についてのドキュメントで、ブッシュ大統領個人の信仰心の在り方が垣間見られます。民主党が予備選に突入する前、いわゆる「インビジブル・プラ

イマリー」と呼ばれる時期、宗教の問題は民主党候補者の間ではあまり取り上げられませんでした。むしろ反イラク戦争、反ブッシュが話題の中心で、この傾向は予備選に入っても基本的には変わらなかったと思います。予備選を戦っている限りにおいては、民主党候補は、宗教ファクターを前面に打ち出すことはありませんでした。これは民主党の支持基盤を固めるためには、宗教ファクターは重要ではないということを象徴しているものだと思います。ディーンの台頭の背景に宗教的なファクターがあったとは思えません。彼の信仰心が問題になったことが若干ありましたが、決定的なファクターではなかったと思います。宗教が前面に出てきたのは、民主党がケリーで一本化した後のことです。より直接的に宗教問題が民主党側で取り上げられたのは、ケリー対ブッシュという構図が明確にできた両党大会以降のことです。

今回の選挙を振り返ると、民主党が宗教的なレトリックを効果的に語れなかったことが決定的な敗因だと言われますが、これは民主党の支持基盤を固めるためには宗教的なレトリックが必要ではないということの裏返しであって、民主党が単に宗教的なレトリックを語ることによって共和党の支持基盤に食い込めるのかということ、相当の疑問が残ります。今回の選挙では、選挙戦を仕切ったとされるローヴの戦略に注目が集まりましたが、カール・ローヴがやったことは、中道層の支持の取りつけより、まず右派支持基盤を固めることでした。しかしながら、重要なのは、すでに述べましたが、そうしつつも、中道層を疎外しなかったことです。こちらの方が、おそらくより重要なファクターで、そこに注目すべきなのだろうと思います。

これまでは、民主、共和両党の底力を比較すると、民主党が優位というパーセプションがあったように思います。それは、突き詰めて考えると、最終的には民主党の方が多数党だという大前提があったのだろうと思います。つまり、投票率が高け

れば民主党は必ず勝つという信念があったわけですが、今回、それが崩れたわけです。これは相当決定的だと思います。確かにこここのところ民主党が選挙に負けるたびに、民主党は党の在り方を根本的に見直さない限り立ち直れないという議論が毎回出てきます。しかし今回は若干深刻であると感じるのは、投票率が高かったのにもかかわらず民主党が負けたという事実です。配布した地図はカウンティごとの星取り票です。アメリカの選挙は面積で争うわけではないので、あまり意味がないという人もいますが、ご覧の通り真っ赤(=共和党)な地図です。青(=民主党)の部分はこれだけ偏っています。民主党がここまで赤くまとめた地域に今後どれだけ入り込んでいけるのか。共和党多数派という新しく出現したかもしれない構図をどこまで民主党が切り崩していけるのか、これは相当困難な作業になるなどの印象を持たざるをえません。

宗教に関してはすでに指摘したように中間組織があまり介在しませんでした。教会がかなり直接的に選挙運動とかかわったわけです。その際、重要なスローガンになったのが、「あなたの価値にもとづいて投票しなさい(Vote your values!)」でした。教会は直接特定の候補を応援することはできません。しかし、「価値」といえば、それが何を指しているのかは明らかです。宗教右派のコミュニティのあいだでは、それは同性婚の問題、中絶の問題です。これは即ち、ブッシュ支持ということです。これが非常にうまく機能したようです。

選挙後の出口調査で、「あなたは何を一番重視しましたか」という質問に対し、「道徳的価値(モラル・バリュー)」という回答が一番多かったことが伝えられました。しかし、これに関しては若干注釈が必要で、宗教右派を今回の勝利にあまり直線的に結びつけるべきではないと思います。では、道徳的価値を構成している要素は何か。ゾグビーが調査を行っています。42%が「対イラク戦争」と答えています。「中絶」

は13%、「同性婚」は9%、「胎胚細胞の研究」は2.1%。つまり、道徳的価値と答えた人がすべて宗教右派であったわけではないということです。さらに、興味深いのは、信心深くない層のあいだでも、2000年の選挙の時と比較すると、ブッシュに対する支持率が増えていることです。これは単純に宗教のファクターのみを重視して今回の選挙を解釈すべきではないことを示しています。

若干オーバーですが、アメリカは三つの意味でマルクス主義に対するアンチテーゼを突きつけたのだらうと思います。いまさらマルクス主義へのアンチテーゼもないとは思いますが。一つは、マルクスは高度資本主義、ある種の独占資本主義は共産主義化、社会主義化していくとだろうと予測しました。しかし、アメリカがまさにそうはならないことをいち早く示したわけです。19世紀後半から20世紀にかけて、社会主義者の間では「なんでアメリカは共産主義化しないのか」と真剣に議論されていました。二つ目は、冷戦時代に国際舞台で革命勢力と真っ向から立ち向かったことです。そして最後に、宗教というものは社会が近代化、世俗化していくと、その役割が相対的に低下していくとマルクスは考えたわけですが、これに対してもアメリカはものの見事に、そうじゃないことを示したといえます。アメリカは間違いなく先進国の中で最も信心深く、宗教勢力も組織化されていて、ある種の政治的潮流を形成できます。

しかし、そういう一般的な傾向と、一つの選挙における勝因を直線的に結び付けることは、今の日本のメディアの報道ぶりを見ても、ちょっと危険だなどの印象を持っています。宗教右派は、重要でないと言っているわけではありません。ただ、理解しやすい説明以外にも注目すべき点があるということを言いたいわけです。

今回の選挙の数字でびっくりしたことは、ヒスパニック票、カトリック票が相当程度、共和党に流れ込んだことです。民主党は黒人票の90%、ヒスパ

ニック系の75%は当然、自分たちの方に転がり込んでくるだろうと思い込んでいたようです。しかし、選挙直前になって、若干、今までと構図が違いうことに民主党は気がつきます。しかし、それでも65%はいけると踏んでいたそうです。実際は56%しかとれなかった。これは民主党にとって厳しい数字です。『民主党多数派の登場(Emerging Democratic Majority)』という本があります。同書では、今後、民主党優位の構図が出てくるとの議論が展開されています。そこにはマイノリティ人口の増加、若い世代の共和党離れが言われているわけですが、今回の選挙で、その一つの核が壊れたわけです。ラティーノ・アメリカンを、民主党支持として当然視できなくなったことは、民主党にとって大きな打撃です。ちょっと大げさかもしれませんが、今回の選挙は、「Emerging Democratic Majority」論に対するアンチテーゼを突きつけた形になったと見ることができます。たまたま選挙前の絶妙のタイミングで、マサチューセッツ州の最高裁が同性婚を認めました。それによって共和党右派、エヴァンジェリカル・コミュニティが動員され、マサチューセッツ州最高裁がブッシュを勝たせたのではないかということを冗談まじりにいう人もいます。どこまでが、今回限りの現象で、どこまでが持続的な現象なのかを注意深く見分ける必要があるかと思います。

今後、宗教的なレトリックを有効に使えない民主党がどうやって党を建て直していくか。選挙の当日にフロリダが落ちたということがわかった瞬間に、民主党系のコメンテーター、ジェームズ・カーヴィルは、「これで民主党は相当暗いトンネルに入らざるをえない」と絶望まじりに語りました。別の場所で、カーヴィルは、「民主党はいいプログラムがたくさんある。しかしそれを束ねる大きな物語が全くない。二大政党性において物語を軸にして選挙運動をつくっていき、有権者の関心を引かなければいけないという政治風土において、これは決定

的な弱点である」といっていました。民主党と比較すると、共和党のナラティブは、実行性があるかどうかは別にして、ある種独特の迫力と説得力があります。ブッシュ政権の国内政策のナラティブを単純化すると、「オーナーシップ・ソサエティ」を軸に社会を再構成し、そこから脱落する人は、「思いやりのある保守主義」によって救い上げる。では、どうやって救い上げるのか。それは「信仰にもとづいたイニシアチブ」によって救い上げる。ここにはある種の世界観をベースにした物語があります。無論、物語だけ、シンボリズムだけでは乗り切れないのであって、シンボリズムが崩壊し、現実と向き合った時、国民がどのように反応するのか。これはまた別問題です。しかし、民主党はカウンター・ナラティブを積極的に編み出していない限り、共和党の失敗を待つ以外にないでしょう。

つい先日、クリントン・ライブラリーの柿落としの時、クリントンが演説をして、さすがにクリントンは演説がうまいなと感心しましたが、はたしてクリントンが民主党に残したものは何か。クリントンは「トライアングレーション」を導入して、共和党のアジェンダを自分の政策に取り入れ、中道層の支持を引きつけました。これは戦略があったようにも見えますが、相当部分、クリントンという個人の資質に依存しているところがあったのだと思います。クリントン人気が、実は民主党が再建に取り組まなければいけない時期に、再建することを怠った主たる要因ではないかとも見ることも可能なように最近思えてきました。クリントンの遺産の評価は複雑だと最近思うようになっていきます。

価値の問題、安全保障に弱いというイメージから、民主党はいかに脱却できるのか。さらに今回は、反ブッシュ機運の高まりもあって、資金集めの点においても、グラスルーツ動員の面でも、民主党は予想外の力を発揮しました。これをいかに維持できるか、これが民主党の再構築の鍵になってくると思います。2008年には当然のことながらブッ

シュはできません。民主党は、この動員力と資金力がある種機械的に作動するようなメカニズムを構築していく必要があるのだと思います。

では共和党優位時代が固定するのか。共和党はホワイトハウスを手に入れ、上下両院で多数派、知事も共和党優勢の構図です。最高裁についてもブッシュ大統領は、場合によっては3人くらい任命することになるかもしれませんが、最高裁も保守派優勢になる可能性が大いにある。人によってはここにFRBも入れる人がいて、アメリカにおける権力の中枢すべてを共和党が手に入れたという人もいます。確かに保守派の台頭という現象は政治面では見られるわけですが、他方で保守が嘆く世俗化が確実に進行しているという事実は否定しようがありません。女性の職場における役割、同性婚に関する考え方、その他のマイノリティに対する意識は、明らかに60年代以降、変化していて、宗教右派が望んでいるような世界とは違っているわけです。世俗化の事実に対して、宗教的シンボリズムでどこまで乗り切っていくのか。エヴァンジェリカル・コミュニティの間には、最終的にはプラグマティックな共和党の政治家に対する諦めもあって、彼らがまたアポリティカルになっていく可能性も、完全には排除できない。

1992年の大統領選挙の時のように、宗教右派の共和党主流派に対する反逆のような構図が出現する可能性も否定できません。宗教右派は、共和党員であるよりも前に「キリスト教徒」であるとの視点をもって、彼らの動向を見ていく必要があります。また逆に、共和党自体が過剰に宗教保守派の方にすり寄っていくならば、それが他の支持層の離反に帰結しないとは限りません。さらに行政府対立法府の対立の構図もあります。第1期目のブッシュ政権は、ポスト9・11といういわば非日常的な状況の中で、行政府の力が極端に強まった時期だと思います。それに対して必ず立法府の側からのバックラッシュがある。ホワイトハウス、議会、

すべての中枢を共和党が手に入れているからといって、すべて共和党主導でスムーズにいくとは限らないのではないのでしょうか。昨今のインテリジェンス・コミュニティ改革法案の審議の過程におけるホワイトハウスと議会の対立でありますとか、上院司法委員会委員長に中道派共和党議員のアーレン・スペクターを任命することをめぐる共和党内の対立でありますとか、対立の兆しはすでに見えていると思います。

最後に、やはり我々としては、米国における保守化という現象をきめ細かく理解する必要性があることを痛感しました。リベラル・エスタブリッシュメントが提供してきたディスコース、例えば「ホワイト・アングリーマン」などがその一例ですが、これから一端離れ、きめ細かく見ていく必要があります。なぜ宗教右派に歩み寄ったのに、中道層を疎外しなかったのか。このメカニズムを理解することこそが肝要だと思います。連邦政府の役割に対する不信感についても、単に「強者のロジック」として一蹴すべきではないでしょう。アメリカは道徳的に不安定になっていて、道徳的な機軸を模索しています。そして、相当数の人がその可能性を共和党に見いだしています。それは、必ずしもエヴァンジェリカルが唱導しているようなモラル・コミュニティへの直接回帰ではなく、ある中間点があって、そこへの回帰を多くのアメリカ人が求めている。要は、米国における保守派の台頭を一過性の現象と見なすのではなく、また悪玉探的にこれを理解しようとするのではなく、その世界観の中に一旦飛び込んで、主観的な動機の意味理解という作業を行っていく必要があります。



米国保守派の支持基盤と宗教保守派の位置づけ

日本国際問題研究所
中山俊宏

1. 語句の整理、基本的事実の確認

- 保守主義とは何か?
- リベラル／プログレッシブ
- 宗教保守派・右派／福音派(エヴァンジェリカル)／ファンダメンタリズム
- カソリックと保守／リベラルなエヴァンジェリカル (Sojourners、Evangelical Social Action、Black Evangelical Church)
- 先進国で最も信心深い国(常に神を信じてきた): 米国 (79%)、英国 (46%)、韓国 (31%)、露 (42%) [2004年2月]
- 多文化化は進んでいるものの依然として「キリスト教国家」
- カソリック (25%)、福音派プロテスタント (25%)、主流派プロテスタント (20%)、世俗派 (15%)、その他 (15%)
- 党派性の主たる決定要因は宗派ではなく、信仰の度合い
- カーター大統領以来、政治家も信仰心をより前面に打ち出す傾向

2. 福音派(エヴァンジェリカル)

- 聖書の字義どおりの解釈／ボーンアゲイン／救済／二元論的世界観／ラヘイ&ジェンキンズ『レフトビハインド』
- 主流派教会の影響力の低下
- 政治との関わり方: 政治＝現世の活動
- 政治的影響力の行使の仕方

3. 米国における保守主義の台頭

- 1950年代: 3つの源流
- 1960年代: もうひとつの「60年代」
- 1970年代: 運動インフラの構築
- 1980年代: レーガン政権
- 1990年代: ギングリッチ革命
- 2000年代: ジョージ・W・ブッシュ政権

4. 保守派の台頭を「リベラル・エスタブリッシュメント」はいかに評価してきたか?

- 排外主義、反知性主義
- パラノイア的反共主義
- 怒れる白人男性
- ネオコン陰謀論
- 宗教右派

5. 保守派と宗教勢力: 「ホワイト・エヴァンジェリカル」の保守化

- カソリック: チェンバース、バックリー
- 民主党の支持基盤としての南部プロテスタント
- マクガヴァン候補、ロー対ウェード(1973年)、ウーマン・リブ、ゲイ・リブ
- ニューライト: 保守的なプロテスタント、コミュニティの喪失、教科書への抗議行動、60年代から70年代にかけてのカルチュラル・ポリティクス、リベラリズム＝オルターナティブ・ライフスタイル
- カーター(ボーンアゲイン・クリスチャン)と福音派: 共和党への流れに一時的に歯止めをかけたカーター
- ジェリー・ファルウェルとモラル・マジョリティ
- ニュー・クリスチャン・ライト、モンデール候補、デュカキス候補
- パット・ロバートソンとCBN、1988年大統領選挙
- ラルフ・リードとクリスチャン・コアリション
- ゲイリー・パウアーとファミリー・リサーチ・カウンスル
- ジェームス・ドブソンとフォーカス・オン・ザ・ファミリー
- 共和党自体の「価値の党」化、中間組織の不在、プッシュ政権の重要性

6. エヴァンジェリカルと外交

- 宗教的自由: Intl' Religious Freedom Act
- 人権、人道、セックス・トラフィッキング
- スーダン: Faith Based Assistance、Samaritan's Purse
- 新保守主義的世界観をどこまで共有しているか

7. 2004年大統領選挙

- 映画「Faith in the White House」(2004年)、ドキュメント「PBS Frontline: The Jesus Factor」(2004年)
- 「見えない予備選挙」
- 「予備選挙」
- 2004年3月以降
- 両党党大会
- ハイテク草の根戦略、527団体
- 選挙結果
- カール・ローヴの戦略／支持基盤固め／中道層を疎外せず／郡ごと(地図-1)
- 「ivotevalues.com」、「モラル・バリュー」(AP出口調査: 22%): なにを意味しているのか?
- ヒスパニック／カトリック票、「Emerging Democratic Majority」論
- マサチューセッツ州最高裁

8. 民主党が直面する問題

- 「プログラム」対「ナラティブ」: オーナーシップ・ソサイエティ／思いやりのある保守主義／信仰に基づくイニシアチブ(FBI)
- クリントンの残したもの



口が増えています。ブルーステイト、都市部は衰退しています。今のような産業動態、人口動態、デモグラフィックな面から見ても、共和党のレッドステイトの方が大統領選挙人の数が増えるという構図もあるのではないかという気がしました。2004年の大統領選挙を、私もモラル・バリューを強調しすぎるのは問題だなどと思っており、モラル・バリューはブッシュを選ぶコードだったと考えた方がいいのではないかと思います。

私がワシントンにいた実感としては、9・11テロ以降の戦争、テロの恐怖の中で、今いる大統領を変えないという心理的メカニズムが働いたのではないのでしょうか。それを考えてみますと、差はあるとしても48%と51%で、ブッシュの陣営の方の選挙戦術が巧みだったとか、ケリーの候補としての難点が多いことを考えると、結構、現職が苦戦した選挙だという見方もできます。にもかかわらずブッシュを選んだのは、戦争や9・11テロの恐怖だったのではないかと思います。

私個人の9・11テロの体験を話しますと、かなり間の抜けた経験をしました。9月10日夜、徹夜をして、全く関係のない原稿を書いていた。11日、家に帰って、電話でたたき起こされて、さあ行こうかという時です。私は単身赴任で、ジョージタウンのポトマック川のニュービリッジの近くに住んでいます。朝、航空機が二機も世界貿易センタービルに突入してテロだ、大変だと、さあ行こうと思ってカーテンをあけると、目の前に黒煙が上がっています。ポトマック川の反対側がペンタゴンで、ずいぶん大きな火事だなと間拔けな感想を持ちながら、現場に向かいました。状況がわかるにしたがって、私のオフィスがあるナショナルプレスビルディング、外国のプレスが入っているビルも破壊されているのではないかと、また連邦政府の職員も外に出て逃げまどうような混乱した状況の中で 私はビルの中に入り、結局二、三日、出られない状態になりました。

その時に、私は、この原体験が、今のブッシュ外

交や政治に対してつながっているところがあると感じました。アメリカのメディアはリベラルな人が多くて、朝日新聞で働いている助手5人も民主党支持派です。彼らは、ブッシュは選挙を盗んだとか、正当性がないとか言っていました。日本の週刊誌で、宮沢さんとETの顔が似ているというような「顔面相似形」を載せているものがありますが、アメリカにも、チンパンジーとブッシュが似ているという顔面相似形のポスターがあります。支局には、いろんな表情をしているブッシュとチンパンジーが並んでいるポスターが大きく張り出してあり、皆でそんなふうに揶揄するというのがブッシュに対する民主党員の感覚でした。それが、9・11テロが起こった翌日、支局に行きますと、5人の助手の机の上に皆、星条旗が翻っているのです。ブッシュは9月11日の後、9月20日に上下両院の合同会議で演説しました。ブッシュは演説が下手ですが、あんなにブッシュを揶揄していたデモクラットの助手が、ブッシュが演説を失敗するとテレビの前ですごく悔しがります。「何故こういう時、ちゃんとやれないんだ」とエールを送っている。ラリー・アラウンド・ザ・プレジデントと言う、危機の時、大統領の前に集まって支えるというアメリカの特質があるといいますが、そういう雰囲気を見たような気がしました。ホワイトハウスの記者会見は日本の会見と違って激しい質問が出るのですが、この場もしばらく穏やかになりました。ホワイトハウスのプレスリリースであまり激しい質問をすると、自分たちが非愛国的に見えるのではないかという思いにとらわれてしまったような行き過ぎた雰囲気はあったのですが、その時は大統領を支える強い凝集力がありました。

その直後に、ペンタゴンの関係者のところにいって「こういう時、アメリカは日本に何を期待していますか」と聞くと、「同盟国だろう。何ができるか先ず考えて、そちらから考えて言うのだ」と突然怒りだされたりしました。その頃、たとえばパキスタンに対して「お前は味方なのか、敵なのか」と突きつけたレ

トリックが、まさに私も浴びせられたわけです。アメリカは社会や政治の危機に直面した時、行き過ぎも含めて、そのインパクトが大きい。その後、炭素菌事件などがあり、自分たちが、いつ、どこで襲われるかわからないという気持ちには強いものがあります。それはチェイニー副大統領が日本からお客さんが来るたびに、「9・11がアメリカに与えたインパクト、これを過小評価してもらっては困ります」と絶えず言い続けたということにもあらわれています。あの事件の心理的インパクトがどのくらいアメリカを変えたのか。今でも効果として残っているのです。日本にいて、日本のメディアなりに考えていると、計り知れないものがあるという感じがします。

ちょうどパウエルが国務長官を辞めて、ライス補佐官が後任になったので、両者の比較を通じて今後どうなるかという展望を探ってみたいと思います。ジェームス・マンというロサンゼルス・タイムズのベテラン外交記者が、ブッシュ政権の外交チーム、チェイニー副大統領、ドナルド・ラムズフェルド、コリン・パウエル、コンドリーザ・ライス、リチャード・アーミテージ、ポール・ウォルフヴィッツという主要なメンバー6人の相互関係を描きながら、アメリカの外交はなぜこのようになっているかをうまく描いた、『ウルカヌスの群像』という本を出しました。この本を読んで自分が体験したことが重なっていたので、腑に落ちなかった点、ミッシングリンクが埋まっていくような感じがしました。この本も踏まえてお話させていただきます。

ブッシュ政権の今の外交を理解するには、ベトナム戦争とデタントという60年代、70年代の経験がどんな影を落としているかということが、理解として欠かせないと思います。ベトナム戦争は、乱暴な言い方をしますと、いろんな教訓がありますが、リベラル派にとっては、あのような海外への関与はよくない、もっと縮小すべきだ、ということでした。キッシンジャー的なリアリストからすると、デタントを押し進める中で、アメリカに有利な勢力均衡

の世界をつくろうということだったと思います。今、ブッシュ政権を担っている外交チームにしてみると、あのような屈辱を繰り返してはならない、アメリカ軍の威信とともに再建して、アメリカが圧倒的な軍事力を持ち、それによって外交を運営して、それによってアメリカを世界に広めるのだという教訓として残されたのです。今、私たちが考えているような、パウエルがハト派で、誰がネオコンだとかいうことを超えて、アメリカの軍事に対する役割、アメリカの軍を強化することによって、アメリカをもう一度世界のリーダーシップとして回復するのだという、大まかなところでは実は共通している。『ウルカヌスの群像』では、このような大きな流れの中にブッシュ政権は結果としてあるのだという位置づけをしています。今のブッシュ政権の説明として、興味深いものがありました。

ここで考えなければならないのは、1968年にニクソンが大統領選挙で勝って以来、8期32年間のうち、20年間は共和党出身の大統領だったことです。共和党の安全保障の専門家はこの間ずっと、民主党のカウンターパートよりはるかに長い間政権の中にいて、アメリカの外交の再構築を考えていたということは大事なポイントではないかと思うのです。

レーガン政権における共和党保守派とネオコンとの結びつき。ネオコンも誤解されている面が強いですが、ネオコンのネオはコンサバティブ、民主党のタカ派、リベラルな人がコンサバティブに転じたということで、蔑称として使われ始めた言葉です。外交におけるネオコンで典型的な人物はリチャード・パールです。防衛政策委員会の委員長を務めて、ウォルフヴィッツと仲がよいのですが、ウォルフヴィッツは政権内、パールは外の顔として存在します。パールにインタビューした時に、「あなたはネオコンと言われていますが」と聞くと、パール自身は「ネオコンというのは、他人がいう言葉で、好きではない。自分はジャクソニアン・デモクラット



だ」と応えました。アンドリュー・ジャクソンのことを思い出して、19世紀のジャクソンかと思ったらそうではなく、ワシントン州選出で民主党のタカ派議員だったヘンリー・ジャクソンのところにパールはいたので、自分は民主党タカ派であり、今でもデモクラットだと言うのです。今でもデモクラットに登録していると思います。なぜネオコンが出てきたか。誤解してはいけないのは、歴史を振り返ると、大きな戦争をしたのは民主党だったということです。フランクリン・ルーズベルトが第二次世界大戦、トルーマンが朝鮮戦争、ベトナム戦争をあそこまでエスカレートさせたのはケネディであり、ジョンソンです。民主党は、国内においてリフォームを考えるように、世界もリフォームしようとしたのです。共和党よりずっと積極的な国際政治への関与をしていたのではないのでしょうか。彼らのことを「冷戦リベラル」と呼びます。国内においては改革志向、国外においては積極的にアメリカのパワーを行使して関与していました。

ところがベトナム戦争を通じて、民主党はどんどん左傾化、リベラル化が進みます。それに失望していったタカ派が、レーガン政権の時に共和党の保守派にくっついてしまったのです。80年代、草の根の保守のレベルでは、宗教右派が保守の政治チャンネルに入り込んだのと同じように、安全保障の問題、専門家の世界で、もともと民主党のタカ派の部分が、共和党の保守派と結びついたというネオコンの動きがあったと思います。

現在のブッシュ政権を見る時、大きなポイントは、父親のブッシュ政権とどう違うかということです。レーガンは共和党の右派で副大統領候補を選ぶ時、中道にアピールする候補として、もともと共和党の中では穏健でリアリストの色彩が強かった父親のブッシュを得ました。しかし、父親のブッシュ政権は再選に失敗する。それについての現在のブッシュとその取り巻きは、十分に共和党の右派をケアしなかったからだと解釈しました。右を固めること

によってしか大統領になることはできないということが、ブッシュ政権が得た、内政選挙基盤からの一つの遺産、教訓であったと思います。

もう一つは、外交からの教訓、具体的には湾岸戦争です。せっかくイラク軍を圧倒しながらバクダッドには侵攻せず、フセイン大統領は残ってしまいました。この間、当時の父親のブッシュ政権内部でもバクダッドに侵攻すべきだという意見はありませんでした。ただし、あまりにも早く停戦を実施してしまったために、フセイン政権による反フセイン勢力に対する弾圧を許してしまいました。現地米司令官のシュワルツコフが現地で結んだ協定で、イラク軍がヘリコプターを飛ばすことを許してしまったがゆえに、イラク軍はヘリを使って掃討作戦を行いました。あまりにも早くパウエルの進言で戦闘行動を終わらせてしまったために、フセインを生き延びさせてしまいました。彼らの陸の部隊の装備も含めて、現ブッシュ政権にとってイラクは父親の時代から残ったトラウマとしての側面があったと思います。そういう中で今回のようなイラク戦争が行われたわけです。

新旧の国務長官についてお話したいと思います。一つは、パウエルはどういう人間かということです。パウエルをどう理解したらいいか、コンドリーザ・ライスをどう理解したらいいか。最初に考えなければならないのは、そもそもなぜパウエルが国務長官になったかということです。パウエルはジャマイカの移民の子に生まれて、アメリカンドリームを体現している人物です。黒人で初めて統合参謀本部議長に就任しました。パウエルは湾岸戦争を通じて名声が高まって、国民の人気もあります。1992年の大統領選挙戦で、ブッシュシニアが再選を求めた時、共和党、民主党両陣営から副大統領候補に誘われました。共和党は、クエールという評判のよくない副大統領でしたが、ブッシュ自身は、クエールが自分に忠実であったために取り替ええない、共和党の副大統領はクエールのままでいくと

考えていました。かたや民主党は、アプローチはしたのですが、パウエルは内政と外交の志向からいくと、共和党、民主党の両方の側面を持っています。彼は民主党の外交政策を評価せずに共和党の政策を支持するのですが、内政においては、銃規制に賛成しており、また、アフーマティブ・アクション(積極的差別是正政策)も支持しています。この二点においては、穏健からリベラルに入る人間だと思います。ここの部分は共和党保守派としては絶対許せない部分です。実は96年の大統領選挙にパウエルが出るかどうかという問題があった時、奥さんが反対している等、いろんなことが取り沙汰されました。しかし共和党がパウエルを大統領候補に擁立しなかった一番大きな理由は、パウエルでは共和党の右派、保守派を抑えられない、保守派の票はとれないということでした。今の共和党の構造では、保守派の支持が得られないと大統領候補にはなれないということです。

2000年、ブッシュジュニアは共和党の保守、レーガン以来の右派的な大統領候補として出馬したのですが、それだけでは勝てません。中道派の支持を得られるかが問題です。その意味で、ブッシュのいう「思いやりのある保守主義」は中道向けのスローガンでしたが、それを体現する象徴がパウエルだったわけです。パウエルを立てることで中道層の票を得る。パウエルは大きな存在であったので、国務長官というポストに就任したのだと思います。

実際のパウエルはどうだったのでしょうか。一つ記憶にあるのは、ブッシュ大統領がイラク戦争への道を進もうとした時に、国連に行くよう大統領を説得したことです。その後は、国連の場で大量破壊兵器があるという説得工作をして戦争を弁明しました。ハト派だったのにタカ派になったのかと、日本でもイメージが混乱したのですが、この点について私はパウエルというのは三つの側面があると整理して考えたほうがいいと思います。

一つは、彼自身の持っている軍事力行使に対

する慎重さです。彼がハト派だとかリベラルということではなく、2回のベトナム戦争を通じて得た彼の経験として、軍事力自身の行使に慎重です。有名なパウエル・ドクトリンが示しているように、パウエルが言うには、軍事力を行使する時には明確な政治目標があり、世論の支持があり、戦力の集中投入をする。まさに彼がベトナムで学んだこと、ベトナムの失敗の裏返しであったわけです。パウエルという人物はある程度、穏健な考え方をしているのですが、基本的には軍事力への慎重さゆえに、相対的にはハト派だと見られた側面があると思います。

二番目には、パウエル自身がどんなふうキャリアをつくってきたかです。彼はジャマイカ移民で、ハーレムで生まれてニューヨーク市立大学を出ています。ウェストポイントや陸軍のエリートではなく、ニューヨーク市立大学で奨学金をもらう予備将校の制度を得て陸軍に入り、だんだん頭角を現すのですが、パウエルのキャリアは、政治と軍事の接点になるようなワシントンの勤務が極めて多いことがその特徴です。30代でホワイトハウスの特別フェローに選ばれ、80年代はレーガン政権のワインバーガー国防長官の軍事補佐官になり、その後国家安全保障問題担当の大統領補佐官になりました。彼は政治、軍事の接点において、制服組にしてみれば、自分たちの要望をうまく背広、政治の場に伝え、政治の場にしてみれば、簡単に要望をうまくとらえて伝えてくれる。私は彼と直接会ったことはありませんが、記者会見では個人的魅力のある人間ですし、組織運営に長けている。今回の国務長官も国務省では極めて評判がよく、官僚機構を運営する点で異能を発揮している。交渉能力にも富んでいる。もう一つ言えば、黒人であることもメリットであったと思います。パウエルをアメリカ軍やアメリカ政府が重用することは、アメリカ軍や政府がこれだけ変わった、ベトナムの悪いイメージがある軍自体が自己変革している例証だと思いま





す。パウエルは52歳で、当時15人いた四つ星の将軍(大将)の中で、最年少にもかかわらず抜擢されました。政軍関係に通じた彼は、自分の置かれたポジションや上司の命令に対して120%満足させていくという形で今日まで歩んできました。政軍関係を円滑に運営していくグッド・ソルジャーであるという側面が強いと思います。

三番目は、彼がまさに国務省という外交を代表する顔であったことです。軍事力を行使する前に外交の手段を尽くすのは、彼が代表する国務省の利益であった。この三つの要素が混ざり合ってパウエルができています。自分の意見に従って「外交的な手段を行使すべきだ」とやりあっても、最終的には大統領の命令に従う。日本で、どうしてパウエルは途中でやめないのか、抗議しないのだといわれますが、私はパウエルがそういう人ではないと理解した方がいいと思います。すなわち非常にプラグマティックな人間で、何か特定のイデオロギーを持っていなかった。逆に言うと、それがパウエルの限界で、ウォルフォヴィッツがネオコンで、パウエルがインターナショナリスト、マルチラテラルだと比較され、彼らの間に路線闘争があったと言われています。たしかにウォルフォヴィッツの路線はあったと思います。しかし、パウエルの路線は本当にあったのかという気がします。パウエルが大きなストラテジーやビジョンを持って、アメリカの外交をどちらかの方向へ舵を切らせるということではなかったのではないのでしょうか。パウエルは、しだいにイラク戦争をやるのがアメリカにとって説得力ある、国際的な認知が得やすい方向に傾きます。プラグマティストであって、大きなビジョンに欠けていたという意味においては、ひょっとしたらアメリカ以外の国、日本も含めてヨーロッパもパウエルに過大な期待を抱き、パウエル自身のビジョンを過大評価していたのではないかと思います。

パウエルと比較して、コンドリーザ・ライスはどのような人でしょうか。この人とは、たまたま2000年、

大統領選挙の年に彼女が外交顧問をしている時、スタンフォードで1時間くらい話をしたことがあります。非常にシャープな人という印象でした。日米関係についてあまり精通しているようにはみられなかったのですが、細かい事情を知らない人が聞くともっともらしく聞こえるような、例えるならばどんな質問を出しても90点、95点の答案を書いてしまうような大秀才というイメージがありました。しかし、ズビグニュー・ブレジンスキー(カーター大統領の国家安全保障問題担当大統領補佐官)とかヘンリー・キッシンジャーが持っていたような、自分のビジョンで無理やり押していくアクの強さはありませんでした。これはライスという人の生い立ちや経験と無関係ではないと思います。

ライスは、アラバマ州のバーミングハムという、最も人種差別の激しいところで生まれ育ちました。8歳の時、バーミングハムの教会の爆破事件があって、彼女の幼稚園、小学校の同級生も殺されています。中産階級の恵まれた牧師の父親と、教師の母親の一人娘として生まれたライスは、努力家です。「アチーバー」という、目標を設定してどんどん行動するというタイプです。最初はコンサートピアニストになろうと考えました。アイススケートなどスポーツも楽しみ、引っ越したデンバーでは、15歳でデンバー大学に入りました。「コンサートピアニストになりたかった」という彼女に、「何故やめたのですか」と聞いたところ、「自分の才能を見切った。大したことはできないし、できの悪い生徒にピアノを教える程度のピアノの教師になるのは不満だった」と答えました。デンバー大学では、後にクリントン政権の国務長官になるオルブライトの父親が、チェコからの亡命者として国際政治を教えていました。彼女は、彼に学び、ソ連東欧問題の専門家、ソ連陸軍、チェコスロバキア等の専門家として伸びていくわけです。ライスは27歳でスタンフォード大学のデニユアをとりました。これはアメリカでは大変なことで、実はアフーマティブ・アクションな

のです。つまり彼女が黒人で女性であったことが大きな要因だったのです。その後1980年代初期、ライスは行政職にもつきます。スタンフォードは女性とマイノリティを最もとらなかったところですが、ライス自身は、アフーマティブ・アクションには現在反対だと言っています。ブッシュが反対なのですから。辛い言い方をすると、黒人のマイノリティとして上昇していく時、共和党、保守の価値観に寄り添う形で、自分が恩恵を受けたシステムを否定するような形までして上がってきたという側面もあると思います。両面あります。ブッシュが黒人教会に訪れる時、ライスがいくと熱狂的な拍手を浴びます。自分たちのホープである側面と、マイノリティの黒人の一つの生き方として厳しい見方もできます。そこはパウエルとちょっと違うのかもしれませんが。ライスは、仕える人の色に自分を染め上げる形で、出世してきたという感じがします。

皮肉なことに、ライスを発見したのは、父親のブッシュ大統領の国家安全保障問題担当大統領補佐官であったブレント・スコウクロフトです。彼はヘンリー・キッシンジャーの弟子で、リアリストであり、穏健なりパブリカンであり、ネオコンとは全く違う見方を持っています。2002年夏、ブッシュ政権がイラクに侵攻するかどうかを検討していた時、最も強く反対したのがスコウクロフトでした。この人に可愛がられて、ライスはホワイトハウスに呼ばれ、父親のブッシュ政権が終わるとスタンフォードに戻って副学長をしていましたが、ブッシュ・シニアに息子が出るのでよろしくと頼まれたのです。外交問題の家庭教師と言われますが、ライスの周りにいる人に聞くと、論争があって、二つの派で戦っていても、両方が人がライスは自分の味方だと思うそうです。自分の意見はなかなか言わないけれど、大変巧みな独特の調整をしているのです。自分の意見はブッシュにしか言っていないのでしょう。忠誠心をみせて、出世してきたのです。パウエルが、国務長官になる前に大統領候補に議せられるようなものを持ってき

て、ブッシュ大統領にとって一種の脅威でありえたかもしれない人物であったのに対して、ライスは寄り添う人に染まっていく面があると思います。ライス自身は、2000年に『フォーリン・アフェアーズ』に書いた論文ではスコウクロフト的なリアリストで、ネーションビルディングに反対しています。そういう影響を受けて、ブッシュ自身もハンプルなディプロマシーを主張して世界の国にあれこれということはないと、ロー・プロファイルな外交を提示していましたが、すっかり変わってしまいました。

今、言われているのは、コンドリーサ・ライスはブッシュの家庭教師であると同時に、弟子ではないかということです。ブッシュは、演説が下手で、それを途中でやめたりするなど、うまく話ができません。ライスはブッシュの言いかけたセンテンスを終わらせると言われている人です。まさにそういう形で、ライスが本当にどこまで思っているかはわかりませんが、9・11テロを体験したブッシュの外交思想の色に自分を染めながら運営してきたような人だと思います。

第2期のブッシュ政権はどうなるか。キーワードは忠誠度、ロイヤリティだと思います。ブッシュ政権はユニークな政権で、週末の背広は必ず紺かグレー、タバコを吸ってはいけない、女性のスカートの丈は膝より上はいけない。ブッシュ大統領が来たら飛び上がるように起立する、ブッシュがいない時に「あいつが」とか「ボス」ということは言わない、必ず「大統領」と言う等、細かいところまで規律が行き届いています。ホワイトハウスの中でバイブルクラスまであるくらい規律が厳しい。ブッシュは相当なロイヤリティを部下に要求し、それがこの政権のスタイルになっているのではないかと思います。

今回、コンドリーサ・ライスはどうなるのでしょうか。プラス・マイナス両方あって、アメリカでも議論は分かれています。穏健派のパウエルがいなくなって、タカ派になってギリギリとなるのではないかという声もあります。日本もヨーロッパも、パウエルの話を





聞くと耳に心地よいわけですね。ホッとするわけです。しかし、大統領と考えが違うとなると不都合なのです。ライスの方が大統領との距離が近いということは、ライス自身の言葉が大統領の言葉であるという点では、額面通り彼女の言葉を受けとれます。外交的には、強化されたポジションとして他の諸国と交渉することができるという、プラスの側面があると思います。

ブッシュ自身の忠誠心、第1期ブッシュ政権の時、思いやりのある保守主義で騙されて、アメリカ大統領選挙のパターンは、大統領は中道よりの政策を施行するのではないかと考えていたのですが、あにはからんや、ブッシュ政権は内政においても、自分の選挙基盤である共和党右派のアジェンダをより押しすることがありました。ブッシュ大統領のスタイルを考えると、次の政権がインターナショナリストになるとはとても思えません。もっとも実際には限界があります。イラクが混沌状態になり、イラン、北朝鮮はどうか、そんなことはできないわけです。イラクは、ブッシュ政権にしてみれば、先制攻撃論で、ブッシュドクトリンを実行に移しやすいところだったと思います。北朝鮮にブッシュドクトリンを適応することは不可能です。イランにしても、ヨーロッパ、日本も含めてもっと深く国際コミュニティに石油も含めて入っていますから、同じような手段をされることに対しては到底賛成できないと思います。現実には、アメリカ外交、軍事のリソースが限られていて、選択の幅が狭いことから、国際社会にある程度の歩みより、あるいは路線修正の微調整くらいはあるかもしれませんが、大きな意味で外交哲学が変わることはありません。ブッシュの個人の質もありますし、ベトナム戦争、デタント以来、ブッシュ政権に携わってきた多くの人たちが、軍事の再建、軍事力を中軸にした安全保障政策を考えていることからすると、難しいだろうと思います。

さらにヨーロッパに目を転じて、ヨーロッパとアメリカの溝は覆いがたいくらい深いと思います。

2000年頃、ドイツの新しい国防計画の指針に、「史上初めて、ドイツの周囲に敵対的な国家が存在しない」と書いてありました。ヨーロッパはこういう発想に立っているのだと思います。国家主権の重要性がだんだん低くなってきて、凸凹道はあるにせよ、欧州連合の形で国家を超えるものを模索して、軍事力の役割が下がってくる。ヨーロッパは、「話せばわかる」という理論になっていると思いますが、アメリカは依然として、ブッシュ政権の外交チームの動きを見ると、国家安全保障、主権国家を重要視する考え方に立っています。この溝はなかなか埋まらないのではないのでしょうか。

ある意味では、ケリーになったらもっと大変だったかもしれないという気がします。彼への期待が高まりすぎて、実はヨーロッパとアメリカの覆いがたい溝が再発見されてしまうのではないのでしょうか。

アメリカはユニラテラリストだと非難されますが、それはブッシュ政権に始まったわけではなく、CTBTにしろ、国際刑事裁判所にしろ、京都議定書にしろ、ほとんどの問題は、クリントン政権の時に反対であったり、議会の見通しが立たなかったりしました。クリントン政権下においてユニラテラリスト的なアプローチが始まるくらい、従来から米欧関係の亀裂は深いものがあったのではないかと思います。

最後に、外交チームのその時々アメリカ外交を担当する人のエートスと、その時にアメリカがおかれていた国際政治の二つを考えてみたいと思います。一つは、ジェイムズ・マンの「ウルカヌス」、これはギリシャ神話の火の神ですが、ブッシュ政権の外交チームでこのように自称しており、彼らが軍事力を中心にアメリカの外交を再建しようとする人たちだとすると、ジョージ・ケナン、ディー・アチソンやアベレル・ハリマン等、冷戦初期においてアメリカの外交を担った人たちのことを、「ワイズメン」と呼びます。彼らの特色は、ウォールストリートの銀行家であったり、法律家であったり、新しい世

界にふさわしい国際制度、秩序をつくることによって、それらにアメリカを適応させ、アメリカの地位や利益を得るという制度をつくってきたアーキテクトだと思います。

次に出てくるのが、デイビット・ハルバースタムのいう「ベスト・アンド・ブライテスト」、アカデミックなバックグラウンドを持つ、ハーバードやMITの学者達です。彼らはキューバ危機では成功しましたが、ベトナムの泥沼に入っていました。第三の陣営としてウルカヌスがあると思います。より深い悲劇は、アメリカ軍を再建して、軍の威信を取り戻し、それによってアメリカの外交を圧倒的な軍事力をつくることで仕切ろうとした人たちが、またイラクの戦争にとらわれてしまい、結果的に見ると、アメリカのプレステージも下がり、アメリカはフセイン政権を倒したが、未だにイラク国内を平定することができないという状況があります。せっかく打ち立てたブッシュドクトリンの予防戦争、先制攻撃の考え方にしても、先制攻撃をするために必要だったインテリジェンスの部分で大量破壊兵器が出てこないことになってしまいました。また、ベトナムと同じように、大きくけつまずいているように見える悲劇があると思います。

それでは今後どうなるのでしょうか。国際政治の構造が変わってしまいました。ウッドロー・ウィルソンやフランクリン・ルーズベルト、ハリー・トルーマンの頃の人たちは、アメリカというものは複数のグレート・パワーズのうちの一つだと考えていました。アメリカは圧倒的に強かったにせよ、大国の一つだという意識がありました。今は、アメリカは冷戦に勝ってしまったがゆえに、冷戦時にあった自制とか、抑制が必要なくなりました。全面核戦争にエスカレートする可能性もありません。なおかつ、冷戦時はあやしげな独裁政権でも反共であれば支持したのですが、今はその必要さえありません。おおっぴらにデモクラシーを広めることが言えます。今のブッシュ政権に対して、リベラル勢力から

オルタナティブが出てこない状況があります。なおかつ、アメリカが単独のスーパーパワーであるという状況からすると、しばらくは混沌や綱引きが続くでしょう。ブッシュ政権は困難な外交より税制の問題、社会保障の問題に取り組んで内政の方でレガシーをつくり、自分を偉大な大統領だと位置づける可能性があります。そのため、外交は混沌としたまま続いて、2008年に、アメリカの外交がもう一度問われるような大統領選挙になる可能性があるのではないかと考えております。



同志社大学「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会 04年11月27日

分極化するアメリカ—世界との関係を修復できるか

▽朝日新聞・三浦俊章

【ね ら い】

折しも第2期ブッシュ政権に向けて国務長官交代が発表された。パウエルの退場とライスの長官就任は、アメリカ外交にいかなる変化をもたらすのか。現政権の外交チームを歴史的文脈においてとらえた上で、新旧長官を比較し、米欧関係修復の可能性を考える。

【報告の骨子】

- I アメリカ外交史の文脈におけるブッシュ政権
 - 1 前史としてのベトナム戦争とデタント外交
 - 2 レーガン政権における共和党保守派とネオコンとの結びつき
 - 3 父ブッシュ政権からの「教訓」：湾岸戦争と宗教右派
- II 新旧米国務長官の比較
 - 1 ブッシュ政権でなぜパウエルが国務長官になったのか
 - 2 パウエルの3つの顔
 - 1) ほんとうに国際協調主義者か？
 - 2) 政軍関係に通じたグッド・ソルジャー
 - 3) 国務省の代表として
 - 3 「プラグマティスト」パウエルの限界
 - 4 コンドリーザ・ライス論
 - 1) 人種差別のまっただ中から—アラバマ州バーミングハム
 - 2) 現実主義者スコウクロフトの弟子
 - 3) ブッシュの「家庭教師」なのか「弟子」なのか
- III 第2期ブッシュ政権は路線を修正するのか
 - 1 内閣改造のキーワードは忠誠度
 - 2 大統領と一体化した国務長官が意味するもの
 - 3 米欧関係の埋めがたい溝